

私の抑留体験記

広島県 石井博之

昭和二十年五月十五日、満第一二二部隊第二大隊は、満州国牡丹江省鏡泊湖、北湖頭に移動し、ソ連軍の侵入に備えるため、越冬準備を兼ね、陣地構築作業をしていた。八月十七日、中隊長より終戦報告を聞き、ソ連軍が進駐して来るまで待機。八月末日、ソ連戦車隊が進駐し、南湖頭まで連行され武装解除となる。

十月一日、掖河に集結、第一大隊に編入する。満州での抑留生活が始まる。ソ連軍の指揮下に入り、連日、糧秣、武器、被服等の運搬、燃料や木材、なんでも使えそうな物品、残らず駅に集積し貨車に積み込む作業をさせられた。作業中に監視兵から時計や万年筆、奉公袋の中に入れていた新品のサラシの「ふんどし」まで、手当たり次第没収された。

収容所内にはそのうち一般邦人も集まって来た。若

い婦女子の中には丸坊主にして綿の入った黒い満州服を着ていたり国民服に戦闘帽の男装をしていた。引揚げ中の在満日本人で、暴漢に襲われて逃げて来たそうだ。「兵隊さん、助けてください…助けてください…」

と泣き叫び哀願してきたものの、我々兵隊も今は捕虜の身、戦争で負けた者の哀れさを思い、悲憤に涙した。

昭和二十一年四月八日、掖河駅より貨物列車に「全員日本に帰す」と言うソ連将校の言葉信じ乗車。どの方向へ、どれだけの距離を走ったのかさっぱりわからない。目隠し同様にして連れ去られ、四月二十九日、ウラル地区ヤランスク収容所に入所。シベリアでの強制労働生活の始まりでした。二キロ離れた製材工場と煉瓦工場に分散された。私は煉瓦工場から煉瓦の貨車積み作業に従事。一日八時間労働とされていたが、時間外で二時間ぐらい毎日のように酷使された。ここでは、ノルマは無かったが……。手送り作業のため手が荒れ、特に指先の皮などは薄くなつて出血するようになった。手袋を要求したが、「寒くなったら支給する」と言っ、て、くれない。着用しているシャツを使ったり、

持つ手をいろいろと変えて耐え忍んだ。

十月初旬ごろだった、ソ連将校が来て『ハラシヨ、ハラシヨ、ハラシヨラポータ（よく働いてくれた。良く働く労働者）だったから日本に帰してやる』と言って、五十名指名されて貨物列車に乗車。満州より入ソした時の貨車とは違い鉄棒の入った四つの小窓は、小さく開放されていて窓の外がチラホラ見えるようになっていた。

十月というのに、窓から時々粉雪が舞い込んできた。車内が冷え込んできた。次第にだれともなく無駄口をきかなくなった。またどこかの収容所に連行されるのではないかと半信半疑だった。やがて貨車は駅のない殺風景な雪一色の原野に停車。そこはスホイロスク収容所だった。白樺の並木が続く荒漠とした丘の上にバラック式の小屋が十五棟あった。周囲は高い鉄条網で囲まれて、四隅の望楼には首に銃をかけたソ連の監視兵が立っていた。

私の抑留生活の中で一番忘れることのできない檻の中の生活と労働の始まりであった。以前ドイツ人捕虜

の収容所に使用していたそうだが馬小屋のように何にも無かった。丸太を積み上げて造った収容所の周りは白樺や松などの原生林の山だった。立木を伐採して、床に丸太を並べ、隙間にはコケを詰め込み、その上にソ連軍がトラック輸送してくれた乾燥した雑草を敷き、毛布一枚と防寒衣が支給され三人で畳二枚程度の広さで寝食を兼ねた。我々五十名を含む混成作業大隊が編成され、森林伐採、用材輸送、道路建設の二つの労働に従事。私は伐採組となった。

収容所からの出入りは、嚴重に人員の点検をする。数の計算が無知識なソ連兵が多く点呼に長時間もかかった。早朝の点呼は暗闇の中で行われ、それから一時間もシベリアの大森林地帯をソ連兵に監視されながら伐採場へ行く。

松の大木と白樺の木が繁茂している密林地である。伏採にはノルマが定められ、一日の作業量（何立方メートル）としてあった。二人一組で二人挽きの大きな鋸（一メートル〜一・五メートルくらい）と斧二挺で径三〇センチ〜五〇センチくらいの大木を倒し、枝を払い、

大木は二メートル間隔に切断し、積み上げて整理。枝は跡形もないように焼却処分する。整理した材木の高さと幅を測って検査。『ノルマを達成せねば収容所に帰さぬ』とソ連兵が毎日、その日の伐採する立木に印をつけ監視していた。

現場に着けば手足が凍りそうなのにすぐ仕事に掛からないとノルマが達成できない。膝まである積雪の中での伐採、(降雪の場合は八十センチぐらい) 周りの雪かきをしてからの作業開始。両方から一生懸命に松の木を切る。寒さのため、顔は目と口だけ出してあとは完全防寒(?)しているが足や指先が疼いてくる。凍傷から身を守るため、作業中は勿論、休憩時も絶えず足踏みや両手を動かしていた。樹木も凍っているのと思うように伐採ができない。切り終わらないうちに急に思わぬ方向に木が倒れることがある。

そんなある日、突然猛吹雪になり急に視界が悪くなってきた。倒れてきた大木の下敷きになって亡くなった友や、落ちて来た枝に頭を打って重傷(入院していたが死んだと聞いた)を負った友が続出した。また極寒

の枝払いは太い大きな枝でも斧でポキンと折れることもあったが、燃やすのに大変苦勞した。白樺の林に行くと皮を剥いてきては助燃材として燃やしていたが、完全焼却処分するには時間が掛かる。ノルマは達成できない。夜十時から十一時フラフラになって収容所に帰る。着替えるものはない。作業の疲れで、いつしか眠る。横になったと思ったら朝の点呼で起こされ、前後の飯と朝食を一度に食べ昼食の黒パンを持ってまた伐採場へと……何度となく続いた。

苦しい一日の労働が終わり、その帰り道、疲れと空腹で雪に足をとられ、重たい足を引きずり歩く。雪道に躓いて転ぶ。列に遅れると監視兵に銃床で叩かれ叩かれて追いつきながら帰った。その帰り道にソ連兵がタバコの吸いさしを捨てると先を争って拾っていたが、皆その気力もだんだんと薄れてきた。

朝食は二百グラムの黒パンと飯ごうに半分(当初は飯ごうの蓋一杯)の高梁か大豆のスープ、昼食・黒パン二五〇グラム、夕食・黒パン二五〇グラムと朝と同じスープ。スープに雪を飯ごうに詰め込んで沸騰させ

一時の満腹感を満たしたり、雪が溶けた春から夏には食べられそうな野草や木の実を採って空腹を補っていた。

長い冬はそももいかない。猛吹雪に襲われて食糧運搬が途絶えて一食分を二回に分けて食べた。体力の消耗、栄養の失調を来すのは当然。朝起きて見たらだれしも声を出さず静かに眠っている。朝の点呼で一人欠け二人欠けてくる。その時になって隣に寝ていた友の死に気付いた。情報も入らず、あてもない日々が続いた。それでも生きていかなければと精いっぱい生き続ける努力をした。死との闘いであった。

こんな重苦しい、悲しい想い出として残るスホイロスク收容所より昭和二十三年七月スベルドロフスク收容所に移動、集結され、九月ダモイ列車にて、十月二十三日ナホトカ着、ソ連兵が『いよいよ日本へ帰れる』と言ってくれた。しかし、度々騙されてきていたのでその言葉は信じられず一抹の不安があったが……。十月二十五日ナホトカ港より永徳丸に乗船、二十八日舞鶴港に上陸。懐かしい祖国の大地を踏みしめた。今も

舞鶴港に入港した時の光景は臉から離れない。

ノルマに追いたてられ酷寒零下三〇度を越える日々を粗衣粗食での抑留生活の数々の苦痛は、到底筆舌に尽くすことはできません。

最後になりましたが、伐採作業中、大木の下敷きになって死亡した友、栄養失調で死亡した友達の御冥福をお祈りするとともに、霊を弔い後世に伝える責任があると痛感いたし、残り少ない人生を努めたいと思っている。

軍歴

昭和十九年三月十日 西部第三部隊現役兵として入

隊

〃 三月三十日 満州第一五二部隊転属

〃 四月二十日 〃 二八五部隊 〃

昭和二十年三月 〃 一二二部隊 〃

〃 八月三十日 満州鏡泊湖南湖頭にて武装解

除

〃 十月一日 満州掖河收容所にて雑役

昭和二十一年四月 入ソ ヤランスク收容所にて建築

用煉瓦貨車積

” 十月 スホイロスク収容所にて伐採作業

昭和二十三年七月 スベルドロフスク収容所にて雑役

” 十月二十三日 ナホトカ収容所

” 十月二十五日 ナホトカ港より永徳丸乗

船

” 十月二十八日 舞鶴港上陸

” 十月二十九日 復員

シベリア抑留記

京都府 谷 才 治

生年月日 明治四十四年二月一日生

現住所 京都府船井郡丹波町須知鍋倉七番地

元陸軍兵長

職 業 指物大工(現在 老齡無職)

昭和十九年三月十三日、現住所より京都伏見歩兵連隊へ入隊する。祖母、妻、子供四人計六人を残す。

昭和二十年、当時は北京春兵団にて八路军(中国共産

軍)討伐のため北支各地を転戦していた。七月ころ

ソ満国境にソ連軍集結しつつあるとの情報により、

モンゴル方面よりのソ連軍の侵攻に備えて、古北口

の万里の長城の上にて警備していた。

昭和二十年八月十五日 終戦。

九月上旬、ソ連軍による武装解除を受ける。

九月下旬、我々の隊はソ連兵着視のもとソ連領に入る。

抑留地はモンゴル人民共和国の首都ウランバートル

で強制労働につく。何年か後にも日本へ帰ること

ができるか?それが何よりの心配だった。

労務は自動車修理工場でトラックなどの木部の取り

付けや取り替え、修理などであった。私の職業は指物

大工なので木工作业は得手で、若い兵隊を指図して自

動車の修理を行った。しかし、食糧が少ないので弱っ

た。朝食は、ヒエ、トウモロコシなど雑穀の粥が飯盒

の蓋に一杯、昼は黒パン三百グラム、夜は朝と同じ雑

穀のかゆだが少し濃い目とスープ(塩汁)だった。こ

れでは労働を癒すには少なすぎて夜寝ても食べ物の夢